顕現後第五主日（2月4日の聖書箇所）

Ⅰ第一朗読（列王記下4章8―37節）

18その子は大きくなったが、ある日刈り入れをする人々と共にいた父のところに行ったとき、19「頭
が、頭が」と言った。父が従者に、「この子を母親のところに抱いて行ってくれ」と言ったので、20
従者はその子を母親のところに抱いて行った。その子は母の膝の上でじっとしていたが、昼ごろ死ん
でしまった。21彼女は上って行って神の人の寝台にその子を横たえ、戸を閉めて出て来た。
32エリシャが家に着いてみると、彼の寝台に子供は死んで横たわっていた。33彼は中に入って
戸を閉じ、二人だけになって主に祈った。34そしてエリシャは寝台に上がって、子供の上に伏し、
自分の口を子供の口に、目を子供の目に、手を子供の手に重ねてかがみ込むと、子供の体は暖かく
なった。35彼は起き上がり、家の中をあちこち歩き回ってから、再び寝台に上がって子供の上にか
がみ込むと、子供は七回くしゃみをして目を開いた。36エリシャはゲハジを呼び、「あのシュネム
の婦人を呼びなさい」と言った。ゲハジに呼ばれて彼女がエリシャのもとに来ると、エリシャは、
「あなたの子を受け取りなさい」と言った。37彼女は近づいてエリシャの足もとに身をかがめ、地
にひれ伏し、自分の子供を受け取って出て行った。

Ⅱ第二朗読（コリントの信徒への手紙Ⅰの9章16―23節）

16もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずに
はいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。17自分からそ
うしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強いられてするなら、それは、ゆだねられている
務めなのです。18では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれ
を無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。
19わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多く
の人を得るためです。20ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るため
です。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配され
ている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。21また、わたしは神の律
法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対し
ては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。22弱い人に対し
ては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものにな
りました。何とかして何人かでも救うためです。23福音のためなら、わたしはどんなことでもし
ます。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

Ⅲ福音（マルコ1章29―39節）

29すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。
30シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。31
イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。32夕方にな
って日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。33町中
の人が、戸口に集まった。34イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、ま
た、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知
っていたからである。
35朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。
36シモンとその仲間はイエスの後を追い、37見つけると、「みんなが捜しています」と言った。38
イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわた
しは出て来たのである。」39そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

今日の福音が置かれた文脈

マルコ一15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」は、福音書全体の序一1―15を閉じる節であると同時に、16節以下の「四人の漁師を弟子にする」物語の導入にもなっている。彼らがイエスに従ったのは、彼らの決断というよりも、神の国が近づいたという「時」が彼らにそうさせている。「時」に引かれて、彼らはイエスに従ったのである。

続く一21―34は「カファルナウムの一日」と呼ばれる出来事を述べる。まず、21―28節では宗教生活の中心である会堂で、悪霊につかれた男から悪霊を追い出す。そして、今週の福音に含まれる29―31節と32―34節では、個人の家で病に苦しむペトロの姑から熱を退散させ、さらに、公の場につながる戸口ではさまざまな病を癒し、悪霊を追い出す。この「一日」はイエスの生涯全体を凝縮したような一日である。イエスは宗教の場（会堂）からも、個人の生活の場（家）からも、公の生活の場（戸口）からも、人も苦しめる一切のものを追い払う。それがイエスの使命である。だから、今週の福音の35―39節にあるように、ひと所には留まらず、「ほかの町や村」へと出て行く。

今週の福音の後でも、イエスはらい病を患っている人を癒し（一40―45）、友人に運ばれ、屋根をはがして、イエスの前につり降ろされた中風の人を癒している（二1―12）。

【ギリシャ語原文の直訳】

29 そして　すぐに　会堂から　出て来て、
　彼らは行った　シモンとアンデレの家のなかに
　ヤコブとヨハネと共に。
30 さて　シモンの姑が　横になっていた　熱があって、
　そして　すぐに　彼に彼らは言う　彼女について。
31 そして　近づいて　彼女を彼は起こした　手をつかんで、
　そして　彼女を去った　熱が、
　そして　彼女は仕えた　彼らに。

32 さて　夕方に　なって、
　太陽が沈んだとき、
　彼らは繰り返し運んだ　彼のもとに
　すべての悪い状態にある者たちを　そして　悪霊につかれた者たちを。
33 そして　集められていた　町全体が　戸口に向かって。
34 そして彼は癒した　様々な病で悪い状態にある多くの者たちを、
　そして　多くの悪霊たちを　彼は追い出した、
　そして　彼は許さなかった　話すことを　悪霊たちに、
　なぜなら　彼らは知っていた　彼を。

35 そして　朝早く　未明に　非常に　起きて、
　彼は出て来た、
　そして　彼は出て行った　人里離れた場所のなかに、
　そしてそこで　彼は祈っていた。
36 そして　彼の後を追った　シモンと彼と一緒の者たちは、
37 そして　彼らは見つけた　彼を
　そして　彼らは言う　彼に　次のことを
　「皆が　捜している　あなたを」。
38 そして　彼は言う　彼らに、
　「我々は行こう　どこか他へ　近隣の町々のなかに、
　ようにと　そこでも　私は宣べ伝える。
　なぜなら　このために　私は出て来た。」
39 そして　彼は行った
　宣べ伝えながら　彼らの会堂のなかに　ガリラヤ全体の中に
　そして　悪霊たちを　追い出しながら。

今週の朗読の構成

【家での癒し（29―31節）】 イエスは会堂で汚れた霊を追い出した後、そこを出て、ペトロの家に入り、熱に苦しむペトロの姑を癒した。

癒しの奇跡は次の三つの場面を含むのが普通である。

ⓐ提示場面　癒しが必要とされる事情の描写。

ⓑ中心場面　さまざまな手段を使った癒しの実行。

ⓒ終結場面　癒しが起こったことの確認。

ここでもこのパターンに従っているが、ここでの特徴は、ⓒが目撃者の驚きではなく、癒された者が「仕えた」とさえていることである。

戸口での癒し（32―34節）　夕方になり、陽が沈み、安息日が終わる。安息日の終了を待ち兼ねていた人々が、家の「戸口」に集まり、イエスによって癒される。

21節でカファルナウムに到着したイエスは、「会堂」と「家」と「戸口」で癒しを行い、町中全体に神の支配の到来を示す。

【翌朝の出来事（35―39節）】 朝早く、人里離れた所でイエスは祈る。弟子たちが彼を見つけると、他の町へ行こうと言って、ガリラヤ全土に出て行く。

38節のイエスの言葉には三つの動詞が現れるが、最初の「我々は行こう」が複数形なのに対して、他は「私は宣べ伝える」「私は出て来た」のように単数形である。単数形に変わったのは、宣教におけるイエスのイニシアチブを強調するためだろう。イエスは神の支配を宣べ伝えるために「出て来た」。それで、悪霊を追い出すことと宣教とがひとつに合わされている。

構成から使信へ

①家での癒し（29―31節）

個人の生活が繰り広げられる「家」に入ったイエスは、熱を出して寝ていたシモンの姑に出会う。この熱は命に関わるわけでもない、ささいな病だったかも知れない。しかし、個人の生活の場における些細なな問題をもイエスは無視しない。

31節でイエスは「近づいて」手を取って、彼女を起こす。イエスが近づくことによって、イエスが運ぶ「神の支配（神の国）」がシモンの姑に近づく。彼女はただ病の癒しにあずかっただけでなく、神の救いに招き込まれたのである。そのことが、一同に「仕える」彼女の姿に表されている。「仕える」とは単に給仕するということでなく、イエスを中心とする共同体の中に生き始めたことを指している。イエスを通して神に出会う者は、また兄弟姉妹にも出会う。神の支配がもたらす救いは、人の身体を癒すだけでなく、生き方をも癒し、「共に生きる」という本来の姿を回復させる。

戸口での癒し（32―34節）

個人の生活の場に続いて、「戸口」でもイエスは癒しを行う。戸口は個人が公の場へと出て行く場所であり、社会生活全体を象徴的に表している。こうしてイエスは、カファルナウムの町全体に神の支配の到来を宣べ伝える。

安息日には病の癒しも禁じられていた。そこで陽が沈み、安息日が終わると、人々は待ちかねたように、町中の病人や悪霊に憑りつかれた人を連れて来る。イエスは、多くの病人を癒し、悪霊を追い出した。

当時、悪霊は生命力を弱めて病を引き起こすだけでなく、神との正常な関係を妨げると考えられていた。だから、病は単なる心身の疾患では終わらず、神との交わりを妨害するものと見られていた。だから、癒しは神との交わりの回復でもあったのである。

翌朝の出来事（35―39節）

29―34節では、イエスの精力的な活動が語られたが、この段落ではその活動を支える力が神との交わりから来ることが明らかにされる。

35節でイエスは、まだ寝静まっている時刻に床を離れ、独りで人里離れた所へ向かうが、それは祈るためである。しかし、祈りの内容については何も述べられてはいない。イエスの祈りは、決まり文句を唱えることでも、くどくどと願いを申し立てることでもない。むしろ、神との深く静かな交わり、それが祈りなのである。

大勢の人が癒しを求めていたのだろう。弟子たちはイエスを捜しまわる。イエスの華々しい業が彼の評判を高める中で、弟子たちは人々の要求に応えることに気を取られる。しかし、祈りの中に時をすごしたイエスは、「近くのほかの町や村へ行こう」（38節）と、予想に反した答を口にする。イエスの使命は「神の国は近づいた」（15節）と宣べ伝えることにある。癒しや悪霊の追放はそれを示すしるしにすぎない。

今週の福音のまとめ

35節の情景を語る話し手の視点は、イエスの泊まった家と人里離れた場所の中間にある。夜がまだ明けぬ暗い町で、イエスは「起きて」、家から話し手の方へと「出て来て」、その目の前を通り過ぎ、郊外の寂しい場所へと「出て行った」。このような丁寧な描写によって、出て行った先へと読者の注意が引きつけられ、そこで祈るイエスの姿に焦点が合わされる。人々の目は癒しの華々しさに向かうが、その背後には人知れず交わされる神との対話がある。イエスはこの交わりにおいて、自らの使命を確認し、活動の力を得るのである。

②今週の福音の言葉から

仕える（ディアーコネオー）

ディアーコネオーは新約聖書では37回使われる。その基本的な意味は「食卓で給仕する」である。マルタはイエスを客人として「もてなし」（ルカ十40、ヨハネ一二2）、帰宅した主人が目を覚ましていた僕たちに「給仕してくれる」（ルカ一二37）。畑から帰った僕の仕事は、用意した夕食を主人に「給仕する」ことである（一七8）。

次に、食卓の給仕にとどまらず、他人のために行われるあらゆる奉仕に使われて、「奉仕する・仕える」を意味する。悪魔から試みを受けるイエスに天使たちが「仕え」（マコ一13、マタ四11）、ガリラヤの婦人たちはイエスに「仕える」（マコ一五41、マタ二七55）。パウロの宣教活動に参与する者は「仕える」者であり（使一九22、2テモ一18、フィレ13）、パウロもエルサレムに献金を差し出し聖なる者たちに「仕えている」（ロマ一五25、2コリ八19・20）。

さらに、イエスが「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」（マコ十45）と教えるとき、この語は十字架を含むイエスの全活動を表している。イエスは他人のために「仕える者」であり（ルカ二二27）、奉仕はイエスが神から受けた使命である。

イエスの奉仕の頂点は十字架であり、パウロはそこに示された神の愛を強調する（ロマ五8）。イエスの弟子はイエスに「仕える者」であるが（ヨハ一二26）、彼らは師であるイエスから愛され、イエスの奉仕を受ける者である（ヨハ一三3）。だから、師のように、弟子もすべての人に「仕える者」になるべきである（マコ九35、マタ二三11、ルカ二二26）。キリスト者の根本姿勢は仕えることにある。初代教会では、この語は教会での奉仕者の務めを表すためにも使われる（1テモ三10・13）。

今週の福音では31節に使われている。ペトロの姑は「仕える」ことによって、癒しが実現したことを示し、癒された者の喜びを表している。ここではまずは「（食事の）給仕をする」の意

味だが、救いに招かれたキリスト者が取る奉仕をも表しているかもしれない。

原文の動詞は、継続的な動作の開始を表せる未完了形であるから、彼女のもてなしは一回限りではなく、これからも継続する活動なのかもしれない。そうであれば、彼女のもてなしは、イエスを通して神の救いに出会った者が取る奉仕であり、すべての人に仕えるキリスト者のあり方を示している。

祈る（プロセウコマイ）

プロセウコマイは「祈る・何かや誰かのために願う」の意味で、もっぱら神への祈りを表す。新約聖書には86回使われている（マタ16、マコ10、ルカ19、使16）。

共観福音書では用例の多くはイエスに関係している。まず、イエスは祈りの人である。イエスは独りで祈るために山へ上り（マコ六46、マタ一四23、ルカ六12）、人里離れたところに退く（ルカ五16）。十字架をひかえたイエスはゲッセマネでも祈っている（マコ一四32、マタ二六36、ルカ二二44）。特にルカ福音書は、祈るイエスを強調しており、洗礼と変容の場面でも、イエスの祈る姿に触れている（ルカ三21、九28・29）。

また、イエスは祈りの教師でもある。イエスは弟子たちに祈り方を教え（マタ六9、ルカ一一2）、真の祈りと見せかけの祈りの違いを教える（マタ六5・7）。律法学者の祈りは人目を気にした祈りであり、見せかけの長い祈りだとされ、イエスの非難の的にされる（マコ一二40、ルカ二〇47）。イエスが教える祈りは、神との深い信頼関係に根ざす祈りである。信頼関係に立っているから、祈る人は求めるものはすでに与えられたと信じることができる（マコ一一24）。

今週の福音では35節に使われている。カファルナウムの宣教を終えたイエスは、朝早く人知れず祈り、再びガリラヤ宣教へと出て行く。だから、35節の祈りの場面は、病を癒し、悪霊を追い出すイエスの活動の描写にはさまれている。イエスの活動の背後には祈りがあり、神との深い交わりがある。この交わりに立って、イエスは働き、神の支配を告げ知らせる。

福音書はイエスがたびたび祈ったことに触れるが、その内容がなんであったかは述べはしない（唯一の例外はゲッセマネの祈りである）。ただ祈ったという事実が報告されるだけである。しかしそのことでかえって、祈るイエスに的が絞られることになる。